

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520001

研究課題名(和文) アリストテレス『デアニマ』の翻訳と註解

研究課題名(英文) A Translation and commentary of Aristotle's De Anima

研究代表者

千葉 恵 (Chiba, Kei)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：30227326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：『魂論』二巻の「魂」の定義に用いられる「力能(dunamis)」そして「完成(entelecheia)」の概念を、その対となる「実働(energeia)」の概念とともに明確に理解するに至った。従来「可能態」と「現実態(energeia=entelecheia)」等と訳されてきたが、これでは精密な議論の展開を正確に理解できない。アリストテレスはロゴスとエルゴンという二つの視点から魂を把握した。ロゴスにおいて事物の一性を開示する「力能」と「完成」の対により「魂」の定義「力能において生命を持つ自然的物体の第一の完成」が提示される。エルゴンは今ここにおいて捉えられる。二巻は従来と異なる翻訳である。

研究成果の概要(英文)：Aristotle offered a definition of soul by appealing to the notions of modal ontology in De Anima II such as 'power-ability', 'completeness' together with their counterpart 'at-work-ness'. I have come to grasp these notions through this project. Hitherto, they have been understood by scholars in terms of 'potentiality' and 'actuality (energeia=entelecheia)'. It is obvious that Aristotle's exquisite and subtle arguments on the way of being cannot be understood by these translations. Aristotle made an access to the soul by two approaches which I call respectively 'logos' and 'ergon' approaches. The logos approach is concerned with the unity of account i.e. definition composed of the pair of 'dunamis' and 'entelecheia' such that 'soul' is defined as 'the first completeness of natural body having life in power-ability'. Aristotle succeeded in grasping the essence of soul by this account. According to the ergon approach, soul is grasped hic et nunc by observing its being at-work-ness.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：魂 完成 力能 実働 待機力能 ログスアプローチ エルゴンアプローチ 定義

1.研究開始当初の背景 アリストテレスの『魂論』の研究には彼の様相存在論の理解が不可欠であるが、entelecheia (完成)とenergeia (実働)の判別、さらには待機力能と実働との共時的な力能の判別がなされていなかった。

2.研究の目的 アリストテレスの『魂論』について様相概念の正確な理解のもとに翻訳を提示すること。

3.研究の方法 アリストテレス研究の中心であるオックスフォード大学において共同研究している David Charles 教授らと様相存在論にもとづく『魂論』の共同研究さらには学会発表を行う。その成果のフィードバックのもとに日本語で翻訳を行う。

4.研究成果 様相存在論については明確な理解に到達した。「魂」と「運動」に対する様相概念による定義についてオックスフォードならびにカンピナス大学において発表した。また、その成果の故に研究期間後にヘルシンキ大学に招かれ講演した(2014.4.28)。

またこれらの成果に基づき『魂論』第二巻について新たな解釈のもとに翻訳を遂行した。「魂」の定義「力能において生命を持つ自然的物体の第一の完成」の研究から、エルゴン上実働がその実働であるところの共時的な「力能」を完成においてあるものが常に実働できる状態である「待機力能」から判別した。これはとても大きな進展をもたらした。例えば、「魂」は「階層的構造にある諸能力の複合」、「諸能力の階層的複合体」(中畑正志氏『魂の変容』p.204)と理解されることがある。「感覚する能力のうちには栄養摂取する能力が、可能的に存在する」(De An.II3.414b31 中畑訳)。従来の理解では「一方質料は可能態であり、他方形相は現実態である」(II.412a9)ことから、栄養摂取魂は感覚魂を持つ動物においてはその質料となるのか問われよう。

このアポリアを避けるためには、実働は力能の発動として実働との共時的な力能とは別に、完成においてあるものが、実働することもじつどうしないこともできる Standby (待機)においてある力能を導入しなければならない。アリストテレスは実働の次元とロゴス次元を判別している。典拠としては、「魂[完成]が内在することにおいて、睡眠[待機力能の類比物]と覚醒[実働の類比物]がある」(II.412a23)、「魂を失ったものではなく、それを持つものが力能にあってその結果生きている(to dunamei on hōste zēn)」(412b25)を挙げることができる。

生きているという実働は今・この事柄として観察というエルゴンにより帰納的に把握されるが、その根拠として形相・ロゴスである「魂」の存在が立証される。従って、魂の階層的理解においても、先述の「可能的に

存在する」と訳されたものは、正しくは「待機力能において存在する」でなければならない。植物魂は動物においては完成においてある形相であることには変わりなく、それがそのロゴスであるところの質料は同時に待機力能にあって植物が摂取されるとき(何も妨げるものがなければ)実働する、即ち栄養を吸収する運動を行う。

また、運動(kinēsis)と変化(metabolē)の総合的理解をやはりロゴスとエルゴン双方のアクセスの分節のもとに遂行するとき、従来の理解とは異なる見解に到達した。『自然学』III1では「運動」は「力能にあるものの完成、力能にある限り」と始点と終点を除く双方の連続的合成体としてロゴス上一なるものとして定義されるが、これは実体の生成と消滅、性質、量、場所移動の四つの範疇に適用される。完成としての形相は定義的ロゴスの形成を通じてのみ把握され、実体の生成もロゴス上判別される。それに対し、VIの「変化」は二時点間における「帰納に基づく」観察上の運動として理解される。二時点は汲み尽し的な組み合わせとして四つ挙げられ、「非基体[非存在]から基体」は以前存在しなかった実体赤ん坊の「端的な生成」として観察される。「基体から基体」は性質、量、場所移動の三範疇に適用されるが、そこではこの三種が連続体存在である「運動」であると規定される。そのことにより「運動」はIII1で「より広い意味」(Ross, Physics.p7)、VIで「狭い意味」の二義があるとして理解されることがある。しかし、実体の生成は二つの基体の二時点間の差異として観察される限り観察の対象とはならない。例えば、実体の生成である受精卵の細胞分裂からエンブリオの形成過程において観察されるのは、場所移動、量、性質変化のみである。他方、非基体から基体への非連続体は非存在から実体赤ん坊への変化として観察される。この視点からは実体の生成は運動ではなく変化である。アクセスの視点が異なる故に、二つの記述に矛盾がないことを明らかにした。

これらの成果は Aristotle's Modal Ontology として早急なる出版が待たれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- (1) 千葉恵「パウロ『ローマ書』私訳と解説(二 一二年一月改訂)」『北海道大学文学研究科紀要』139、pp.1-133
2013年3月[査読無]

(2) 千葉恵 「アリストテレスにおける発見的探求と何であるかの論証」『ギリシャ哲学セミナー論集』Vol.IX/X,pp.38-56、2013年3月[査読有]

(3) 千葉恵 「内村鑑三と第二の宗教改革「ローマ書」における改革の理論的基礎」『基督教学』第47号、pp.4-32、2012年7月[査読有]

(4) Kei Chiba Uchimura Kanzo On Justification by Faith in his A Study of Romans: A Prospect of Semantic Analysis of Romans, *Journal of the Graduate School of Letters*, Vol.7 pp.1-20, (Hokkaido University 2012) <http://hdl.handle.net/2115/48754> [査読無]

(5) 千葉恵 「アリストテレスの発見的探究論と何であるかの論証」『北海道大学文学研究科紀要』136、pp.1-51 2012年3月 <http://hdl.handle.net/2115/48731> [査読無]

(6) 千葉恵 「ペラギウス論争とその調停者パウロ」『北海道大学文学研究科紀要』134、pp.1-29 2011年7月 <http://hdl.handle.net/2115/46861> [査読無]

〔学会発表〕(計 5件)

(1) Kei Chiba, Aristotle's Methodology-The Place of Dialectic in his Intellectual System, Limits of Dialectic, Oxford University, 2013.9.8.

(2) Kei Chiba, Aristotle's Essentialism -Introductory Context of Essence, Kripke, Logic and Ontology, Beijing University. 2012.8.30.

(3) Kei Chiba, Aristotle's Definition of Kinesis in Physics III1-3 -Introductory context of 'Entelecheia', Aristotle's

Hylomorphism, Oxford University 2012.6.4.

(4) Kei Chiba, Aristotle's Modal Analysis of Being, Definition and Causality in Aristotle's *Metaphysics* and *Posterior Analytics*, Campinas University (Brazil) 2011.6.27.

(5) 千葉恵 「アリストテレスにおける存在のロゴス(完成態)とエルゴン(働き)による相補的分析」、日本西洋古典学会(静岡大学) 2011.6.5

〔図書〕(計 3件)

(1) Kei Chiba Uchimura Kanzo on Justification by Faith in His Study of Romans--A Semantic Analysis of Romans 3:19-31--, *Living for Jesus and Japan-The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzo*, ed.H.Shibuya and S.Chiba pp.162-197(Eerdmans 2013.10). [査読無]

(2) 千葉恵 「博物学者アリストテレスとダーウィーン-目的論的自然観と進化論は両立可能か」『生物という文化人と生物の多様な関わり』北海道大学出版会 池田透編 pp.197-235、2013年3月[査読無]

(3) Kei Chiba Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of what it is, *The Oxford Handbook of Aristotle*, ed.Christopher Shields pp.171-201 (Oxford University Press 2012.6) [査読無]

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

Philosophy Department in the Globe,

<http://www.let.hokudai.ac.jp/archive/20>

12/09/post-193.php

6．研究組織

(1)研究代表者

千葉 恵 (Kei Chiba)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：

30227326

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：